

「赤ちゃんの「理性」」

赤ちゃんは、泣いたり、笑ったり、怯えたりと感情そのものを表に出します。

それでは、「考える」という点ではどうでしょう。赤ちゃんは果たして「考える」、つまり理性を持っているのでしょうか。

実は、感情と理性は決して分けることのできない「心の能力」を育みます。

二つは、共通した脳の場所が関係していることも分かっています。赤ちゃんは要求すること、嫌がることがあれば泣きます。言葉を喋り始めるころになると、より一層、活発に動き回り、感覚を求め、刺激を求めます。

それからどうするか……。ここが大切なのですが、得た情報の分析が活発になっていき、感情をもっと深く味わいたいという新しい欲求が生まれ、さらに情報を得ようとしています。そのため報を言葉の世界でまとめようとします。……といった流れで心は成長していきます。

3歳ぐらいになると、言葉の世界、言い換えれば理性の中の新しい欲求が急速に芽生え始めます。それが好奇心と呼ばれるものです。言葉を喋り始めてしばらくすると「何で赤いの？」

「何で大きいのか？」といった具合に、親にしてもらいたいと思うほど質問攻めに合いますよね。要するに感情の仕組みが、いつの間にか、言葉の世界



写真はイメージです

に取り入れられるということになります。そして、物語りを聴いて、悲しくなったり、感動したりするし、「なるほど」という知的高揚感も生まれる時期に至ります。

こうして、子どもは感情の世界からより一層豊かな理性への世界へと心が広がっていきます。理性としての知性は、常に感性に満ちてこそ高い能力を發揮します。他の子に比べて、うちの子は頭が悪いと思う前に、感情の豊かさ、感性の広がりを見つめてみましょう。子どもが「何で？」と問いかけた時、微笑みを絶やさず粘り強く答えること……。それは小さな子どもにとって、足し算を教わる以上の知的経験となります。子どもの心とはこうしたものです。

問合せ先／生涯学習課 スポーツ振

興係：☎57・4850

「乳幼児の「記憶」と「体験」」

人間の記憶力はどこまで伸ばせるか……。

このことに関心を持たない人はいないでしょう。とりわけ記憶力があることに越したことはありませんし、受験生にとっては深刻な問題です。

ところで大人になってから子どもの時のことを思い出そうとしても、赤ちゃんの頃のことは覚えていません。乳幼児は、言葉の力が不十分なので覚えていないと多くの人が思うかもしれませんが、しかし、その時期に体験したことが将来において大きな影響を及ぼすことは誰もが理解しています。つまり「体験」は、心、脳、体のどこかに「残っている」ことは確かではありません。それは、はたして記憶と違うものなのでしょうか。

記憶には、自分の出身地名を知っているという言葉の記憶と、自転車にいつも乗れるという動きの記憶に分けることができます。しかし、中学生が英単語を記憶するときは一生涯、口ずさみながら、また何度もノートに書きながら覚えようとしますね。よく考えてみると、その「記憶」は、言葉の記憶なのか、動きの記憶なのかの違いが微妙となります。結局、記憶は「想い出

せる」内容とその特徴で、いろいろな記憶の定義に分類されていますが、根底には共通した「体験」の

力が関係しています。言葉の能力が未熟な子どもにとって、体験や経験は、大人とは違った意味合いがあると考えた方が良いでしょう。



赤ちゃんが言葉を喋り始めるのは1歳を過ぎてからです。だからといって0歳の赤ちゃんに話しかけても全く無駄というわけではありません。たとえ理解していなくても、「聞く」という体験が、突然実を結ぶことになります。1、2、3歳の頃の体験は、確かに大人になっても思い出せませんが、確実に残っています。ですから、無駄とは考えず、小さな子供には、いろいろな体験をさせてあげましょう。その体験が、質を変え、意味を変えて、何かの形で花開くこととなります。身近に幼い子どもがいたら振り返ってみましょう。この子は、毎日、どんな体験をしているのだろうか……。

問合せ先／生涯学習課 スポーツ振

興係：☎57・4850